謎だらけの葛飾北斎の「キューピッド」

佐々木　隆

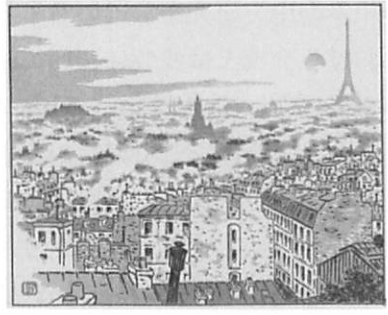
プロローグ

江戸時代におけるシェイクスピアのプロット類似作品の調査していた時、シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)と歌舞伎の関係を研究する平辰彦氏より近松門左衛門(1653-1725)とスペインの関係に言及した近松洋男『口伝解禁　近松門左衛門の真実』(2003) という本を紹介された。[1] これまでの定説とは全く異なるところのアプローチである。口伝というところが大きな鍵だ。また、国際文化交流という大きな枠組みの中で研究をしている筆者は、江戸時代における日欧の美術分野における交流又は波及について強い関心を持っている。中学・高校の教科書にはこれまで「鎖国」(中国とオランダを除く) という表現が用いられてきた。鎖国をしていたからと言って、江戸時代に全く外国のものが遮断されていたわけではない。日本の事物が西欧に全く伝わらなかったわけでもない。また、ヨーロッパの日本文化ブーム、すなわち、ジャポニスムを調査すれば、葛飾北斎(1760-1849)に行くつくところは当然のことである。葛飾北斎関係の研究書を読んでいく中で、荒井勉『北斎の隠し絵』(1989) に北斎の描いたキューピッド、天使についての紹介があった。定説は何か新しい発見があれば、定説でなくなるのは宿命である。仮説と実証は研究の大きな柱となる部分である。北斎がキューピッド、天使を描いたというこの衝撃的な事実を確認するため、これまで図録等では見ていたものの小布施にある北斎館にも訪問し、「北斎のキューピッド」について調査することにした。本稿はその文献調査とフィールドワークをまとめたものである。

1　知れ渡る北斎

北斎の名は日本人であれば必ず聞いたことのある名前、また、詳しい

ことはわからないにしても、富士山を多く描いた芸術家として誰もが知っている存在である。1856年頃、フランスのエッチング画家フェリックス・ブラックモン（Félix Bracqemond, 1833-1914）が包装紙として使用されていた『北斎漫画』発見して以来、北斎の名前はヨーロッパで知られるようになったことは周知の通りである。ジャポニスムの火付け役と言ってもよいかもしれない。また、北斎『富嶽三十六景』に大きな影響を受けたアンリ・リヴィエール（Henri Rivière, 1864-1951）は『エフェル塔三十六景』(Les Trente-six Vues de la Tour Eiffel, 1888-1902)を発表している。



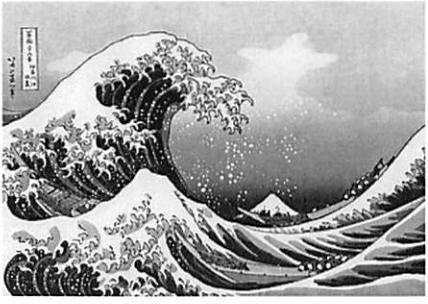
（2）

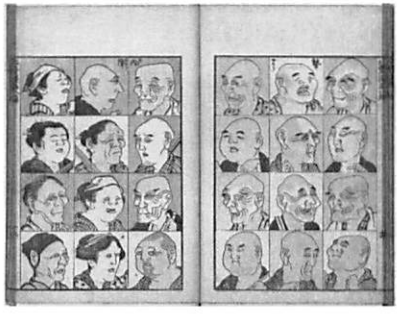
1998年のアメリカの『ライフ』誌に「この1000年で最も重要な功績を残した世界の人物 100 人」に 日本人としてただひとり選ばれたのが葛飾北斎である。その後、ダグラス・マッグレイ(Douglas McGray)が2002年に発表したクール・ジャパン論[3]以後、2010年に北斎生誕250

年、2014年に『北斎漫画』200年という記念の年を経て、ますます北斎の名は日本だけでなく、世界中に知られるようになった。

2　葛飾北斎のイメージ

一般的に葛飾北斎と言えば、富士山を描いた『富嶽三十六景』(1831?-1835?)、『北斎漫画』(1814-1878) で知られている。北斎は浮





世絵で知られているが、実は肉筆画においても見事な作品も残している。ここで注目したいのは肉筆画である。この肉筆画の中にキューピッドが描かれているのだ。これに伴って、北斎が信州も訪ねたことなど、北斎研究に一つの大きな起点ともなったのではないだろうか。長野県小布施には肉筆画の『上町祭屋台天井絵・怒濤図』(1845) があり、そこにキューピッドが描かれているのである。

ここで3つの問題点が提示できる。第1点は北斎研究における北斎の小布施滞在についての取り扱い、第2点は『怒濤図』(1845) に描かれたキューピッドについて、第3点は北斎が西洋から受けた影響についてである。ここでは第2点に重点を置き論じていきたい。他の点については別の機会に論じる予定である。

3　北斎研究における北斎の小布施滞在と『怒濤図』の制作について

西欧で高い評価を得た北斎が日本で評価されるようになるのは、この西洋での評価の逆輸入のプロセスを経ることとなる。これを受けてまず、江戸時代の芸術の再評価が始まるのである。1867年のパリ万博に日本から日本美術（浮世絵等）が出品されヨーロッパで注目を浴びた。その後は明治維新を迎え、近代化の道を歩むこととなる。浮世絵版元であり、浮世絵商である小林文七(1862-1923)による日本初の『浮世絵展』（上野松源楼、1892年）（上野伊香保、1898年）、日本美術協会での『北斎展』（1900年）などが開催された。

北斎が屋台天井絵にキューピッド（天使）を描いたのは小布施であるが、北斎年譜、北斎年表おいて小布施・訪問の取り扱いがまちまちである。もちろん、年譜は何を重視するかによって省略されることがあるが、北斎の生涯を中心に研究する書籍に掲載される年譜ではどうなっているのであろうか。

北斎が描いた「女波図」の額縁絵のキューピッドを扱うためには少なくても２つのことに注目する必要がある。第１に北斎が小布施を訪ねていた記録、第２に上町祭屋台天井絵「怒濤図」（「女波図」）に関する記述である。これまでの北斎の研究等での流れを時系列で簡単に紹介しておきたい。なお、すべての文献を確認することはできなかったため、本稿は中間報告となる。2016 年 11 月 22 日に開館した東京都墨田区のすみだ北斎美術館の図書室の資料を多く利用した。なお、長野県小布施の北斎館は訪問したが、島根県津和野町の葛飾北斎美術館は 2015 年 4 月に閉館となり、訪問する機会がなかった。葛飾北斎美術館は北斎研究者の永田生慈氏の故郷に同氏の研究資料を中心に展示したもので、その一部はすみだ北斎美術館にも寄贈されているという。

飯島虚心『葛飾北斎伝』（上）蓬枢閣、1893 年 9 月

「天保二三年の頃、北斎翁信州高井郡小布施村に到り、門人高井三九郎の家に寓し、居ること一年、遠近画を請ふ者多し」（50 丁）

＊天保二、三年の頃となる。なお、『怒濤図』についての言及なし。

＊本書は北斎の研究者には必読書[5]

織田一磨『北斎』アルス、1926年5月

＊「天保二年に信州高井郡、高井三九郎方へ旅立った。うして一年余り滞在して製作を遺した。帰途に「八の字のふんばり強し夏の富士」という句を残して江戸に帰った。」(p.135)

＊『怒濤図』についての言及なし。

野口米次郎『葛飾北斎』野口米次郎、1930年5月

＊「北斎は天保二三年の頃、即ち彼の七十二歳の時、信州高井郡小布施村で高井某の家に厄介になって、そこで絵を描き、一年の滞在を終へて、いよいよ発足する時、彼は、『八の字のふんばり強し夏の富士』の一句を吐き、壮者を凌ぐ壮大な意気を示した」(pp.36-37)

＊北斎が小布施村に赴いたことまでは言及されているものの、上町屋台天井絵については全く触れていない。

楢崎宗重『北斎論』アトリエ社、1944年3月

第5章　北斎藝術大成時代

(2) 小布施村の遺蹟

「小布施村高井三九郎鴻山に寓して、長く滞留した北斎は布施の屋台と岩松院の天井絵とがある。

即ち当地では、『北斎小布施村高井鴻山の家に寓居せし際、鴻山の需めによりて、弘化二年七月起筆、翌三年閏五月に至る迄満一ヶ年の間、畢生の技術を揮ひて書きたる、極彩色細密画なり。人形は水滸伝中宗江の軍師公孫勝が、魔法を用ゐて龍を天に舞はしむるう図。北斎の下図によりて、龜原和田四郎彫刻せり。和田四郎彫刻に当たり、改造すること数回に及び、始めて北斎の意に叶ひたるものなり』と伝へてゐる。」(p.453)

＊第 105 図の「天井画」は「男波図」。第 107 図の「小布施上町屋台」は全体の写真。具体的に「女波図」は紹介されていない。

織田一磨『北斎』東京創元社、1957 年 7 月

＊「天保二年に信州高井郡、高井三九郎方へ旅立った。そうして一年余り滞在して製作を遺した。帰途に「八の字のふんばり強し夏の富士」という句を残して江戸に帰った。」(p.89)

＊『怒濤図』についての言及なし。

『葛飾北斎名作展』白木屋・日本橋、毎日新聞社、1960 年 9 月

＊生誕 200 年記念：1960 年 9 月 6 日～9 月 11 日まで開催

＊天井絵に関する展示なし。

＊小布施及び屋台天井絵に関する記載なし。

『高井鴻山と信州の北斎』信濃美術館、1968 年 3 月

＊1968 年 3 月 12 日～4 月 7 日まで開催

＊「天保七年三十一歳で郷里小布施に帰った鴻山を北斎は前後二回訪ねてはいるが天保八年頃から弘化二年頃までと残された資料により想像はできるものの滞留期間を明確にする資料はまだ見当たらない。ただ九十年の生涯に九十三回もその居を変えたといわれる北斎が晩年に鴻山宅を訪ねて厚く遇されて生涯の中で最も居心地がよかったとものと思われつい長期間（一回の滞留二年余といわれる）滞在したことは事実で北斎は版画の下絵書きの職人から画人としての自覚をもったともいわれ、この間に晩年（時に八十五、六歳頃）の円熟した画技を十分発揮したことは小布施に伝わる屋台の天井絵二枚の波図を新しく発見された他の屋台の天井絵の鳳凰と竜図のような大作を残した事からも十分察知出来ることである。伝えられる二度目の来訪が確実とすれば新発見の鳳凰と竜図など一連の大作を描くため鴻山の招きに応じて来訪したものと想像しても

よさそうな北斎畢生の力作であり北斎研究に新しく重要な資料を提供したものとして注目される」（頁表記なし。但し、p.5に相当）

＊上町着色屋台天井絵の女波図と男波図がモノクロで掲載され、エンゼルもはっきりとわかる。本文中でエンゼルへの言及も解説もない。

『北斎肉筆画名品展』日本経済新聞社文化事業部、1972年1月

＊展示会カタログ

「20　怒濤（祭り屋台天井絵）」(p.89)

＊モノクロの写真掲載。キューピッドも映っている。

解説「20　怒濤（祭り屋台天井絵）

「北斎は、信州小布施の高井鴻山宅に滞在、弘化二年（八六歳）に祇園囃子（はやし）の山車を製作し、その天井に前後二面の「怒濤図」を描いた。縦一・二二メートル、横一・二二五メートル、厚さ〇・九一センチの銅板に、前方は左渦で男波、後方は右渦で女波の怒濤である。周囲の枠は金箔を置き、西洋草花・獅子・極楽鳥・りす・エンゼル・孔雀などを装飾として描いている。絢爛たる色彩は実に見事で、周囲の図様はおそらく鴻山が海外から得た資料を北斎に与えたものと思える。」(p.104)

＊北斎年譜

「天保一二　一八四一　82　このころ第一次信州小布施旅行、高井鴻山（三九郎）宅に逗留。

弘化　二　一八四五　86　第二次信州小布施旅行、鴻山宅に逗留。山車の天井絵「怒濤図」を描き、同地点岩松院天井絵の下絵を描く。」(p.119)

尾崎周道『北斎』日本経済新聞社、1972年4月

＊図版「33　濤（天井絵）」、図版「34　濤（天井絵）」あり。それぞれ上町祭屋台天井絵、東町屋台天井絵である。カラー。「33　濤

(天井絵)」にはキューピッドがはっきりと見える。解説はない。

＊「2　信州小布施村の北斎（調査ノートより)」

「◇山車の天井絵「濤」(図版 33・34)。縦四尺５分厚さ３分の銅版に、前方は左渦で男波、後方は右渦で女浪を描いて、豪快な渦巻く怒濤である。碧漪軒と号する居室で成ったにふさわしい色感である。周囲の枠は金箔置きで、西洋草花、獅子、極楽鳥、栗鼠、エンゼル等を装飾的に描いている。この枠の図案は北斎のものであり、彩色は鴻山とある。」(p.54)

＊ "In 1845 Hokusai aged eighty-six made his second visit to Obuse Village in Shinano Province (Nagano Prefecture) and stayed at the abode of Takai Kōzan. Kōzan was his friend who sang about Hokusai's art as quoted at the beginning of this article, and probably the only friend of his heart. Hokusai had lived with him there for two years in 1841 and 42; now he stayed for another two years at the latter's dwelling. In his life of permanent roving and address-changing, it was the place where he stayed for the longest periods of time. His works during his sojourn here, which are rich in sedate, generous effect, seem to tell that the place provided him with a favorable setting of life. There he painted "Waves" (Pls. 33, 34) on the ceiling of a festival float and decorated its frame with Western flowers, lions, birds of paradise, angels and other such Western motifs in rich bright colors. He also painted "Fishes and Shellfish" (Pl.30) in oil colors on linen canvas, and drew more than six hundered detailed sketches of flowering plants, birds, fishes, figures and insects. His life at Obuse Village presents many important problems concerning the past and future studies of Hokusai." (p.9)

＊(Translated by Shigetaka Kaneko)

安田剛蔵『画狂北斎』有光書房、1971年5月

＊「弘化二年、八十六才の高齢で小布施村に高井鴻山を訪ね、半歳滞在した。(p.172)

＊屋台天井絵については言及していない。

菊地貞夫編『日本の美術』(第74号　北斎）至文堂、1972年7月

＊「晩年の肉筆画」

「彼の描いた肉筆画は多いが、その印章に、『亀手蛇足』という印文のものと『よしのやま』の印文を用いたものは、特にすぐれた作が多いといわれる。そして信州小布施の高井三九郎鴻山のもとに滞在した際の作品は、近時、金子孚水氏、尾崎周道氏の努力によって、数々の力作が紹介されて、注目を集めている。」(p.93)

＊屋台天井絵については言及していない。

＊「北斎年譜」

「天保十二年　1841　八二　○このころ第一次信州小布施旅行、高井鴻山宅に逗留。『絵本武者部類』一冊（絵本）・北斎改葛飾為一。

弘化　二年　1845　八六　○第二次信州小布施旅行。　鴻山宅に逗留。山車天井絵「濤図」を描き、同地岩松院天井絵の下絵を描く。翌年まで滞地。

＊ただし、キューピッドについては言及されていない。

飯島虚心／瀬木慎一校訂『葛飾北斎伝』(複製版）造形社、1978年4月

「四　旅行　　天保十一年　信州小布施

弘化二年　　信州小布施」、p.16.

＊天保十一年の小布施訪問については後年の研究では訂正されている。

「葛飾北斎　小布施上町着色屋台天井絵」、p.21.

＊モノクロ写真掲載あり。「女波図」（キューピッドは描かれている）と「男波図」あり。ただし、解説なし。

太田記念美術館学芸部編『長瀬武郎コレクション葛飾北斎図録』浮世絵太田記念美術館、1980年11月

＊上町祭屋台天井絵の掲載なし。

鈴木重三「葛飾北斎年譜」

1845　弘化2年　86歳　信州小布施に旅行し、高井鴻山（三九郎）方に半年逗留。鴻山とともに、小布施の屋台と、岩松院の天井絵を描く。」(p.129)

辻惟雄『北斎』（ブック・オブ・ブックス　日本の美術31）小学館、1982年6月

＊「現在、小布施の北斎館に展示されている屋台の天井画は、そのおりの北斎の作と考えられるものである。屋台は東町のものと紙町のものと二台あって、東町のほうには鳳凰（挿102）と竜（挿103）が描かれ、上町のほうには怒濤が二図（図59、挿104・105）、それぞれ濃密な彩色（油絵具を部分的に用いているともいわれている）が描かれている。そのうち、鳳凰と竜が、天保十五年の滞在のおりの作、怒濤が弘化二年の滞在のおりの作で、後者の縁に描かれた、エンジェルまでもが混じるエキゾティックな花鳥文様は、北斎の下図にもとづいて鴻山が描いたとされる。

この四図は、北斎ひとりの筆とするより、同行した阿栄、あるいは他の門人との合作とみるべきであろう。鳳凰や竜など、北斎とするには筆致がいくぶん弱いからである。とはいえ、文様風で

ありながら妖しいばかりの粘着力をもって見る者に迫るこれらの図もまた、北斎の監督なしには考えられず、彼の長い作画生活の棹尾を飾るにふさわしい。なかでも、怒濤図のうち縁にエンジェルの描かれたほう（図 59、挿 104）は、構図も力強く、描線にも鋭さがあって、ここに北斎自身の筆を認めてよい。」（p.157）

＊モノクロ写真があるがここでは省略。怒濤図にはエンジェルが確認できる。

＊「葛飾北斎年譜」

一八四四　弘化一　八五　このころ向島小梅村に居住。高井鴻山の招きで信州小布施に旅行。
肉筆「鳳凰・竜図」（小布施東町祭屋台天井画）

一八四五　　二　八六　小布施に再度旅行。大絵馬「須佐之男厄神退治図」を牛島神社に奉納（関東大震災で焼失）
肉筆「怒濤図（小布施上町祭屋台天井画）、読本『釈迦御一代記図会』(p.168)

＊巻末「ことば」

「ところで、昨秋本社が神戸で開催の『北斎展』に肉筆画の優品の初公開や新発見があり、このたびそれらの初公開作品を含む肉筆画の名品を集め『北斎肉筆画名品展』を開催いたします。幸い御物をはじめとする未公開の作品、また新発見の肉筆、画稿を加え、名品のおおかたが出版されることとなりした。」

永田生慈『葛飾北斎年譜』三彩新社、1985 年 10 月

＊「天保一四年(1843)　癸卯　八四歳」

四月　信州小布施の高井鴻山へ手紙を送る。
本書簡には、祭屋台天井絵の下絵が進まず、阿栄の旅行手形がなかなか取れないとあり。また、来春三

月には小布施へ行くとあるが詳細は未定。」(p.101)

八月九日　信州小布施の高井鴻山へ手紙を送る。

本書簡は、鳳凰下図の遅れを詫び、彩色が進まぬために輪郭のみを送るので、これをドウサ引紙に写して返送すれば着色は自分が行うとあり。(p.104)

「弘化元年(1844)　12・2　甲辰　八五歳」

三月頃　この頃、信州小布施に旅すか。

天保十四年四月の高井鴻山宛書簡に、三月頃小布施に行くとあり。(p.106)

「弘化二年(1845)　乙巳　八六歳」

一月　本年も信州小布施に滞在するといわれるが、詳細は未定。(p.107)

荒井勉『北斎の隠し絵』ＡＡ出版、1989 年 12 月

「前　章　江戸時代に同化しなかった人物」の「エンゼルの姿を発見」(pp.16-19)

「第１章　エンゼルを描いた背景」(pp.33-52)

「北斎八十歳代・新年表（荒井勉制作年表）」(p.249)

＊「北斎年表（岡隈三郎、瀬木慎一、永田生慈、制作年表引用）」では小布施については「一八四五　弘化二　信州小布施村に旅行、本所荒井町に居住」とあるが、新年表では「一八四四　弘化元　十一月頃、小布施に滞在　小布施・東町屋台に『龍・鳳凰図』を描く」「一八四五　弘化二　小布施・上町屋台に『怒涛図』を描き始める　七月頃、江戸に向かう　額絵『須佐之男命厄神退治の図』『怒涛図』鴻山の加筆で完成

財団法人北斎館『肉筆葛飾北斎』財団法人北斎館、1992 年 9 月

＊カラー写真。東町祭屋台、東町祭屋台天井絵「龍」「鳳凰」。

上町祭屋台、上町祭屋台天井絵「男波図」「女波図」（キューピッドあり）

＊飯沼正治「葛飾北斎と小布施」(pp.82-86)が収録されている。上町祭屋台天井絵「男波図」「女波図」については触れているが、縁絵のキューピッドについては触れていない。

＊北斎略年譜

「一八四四　天保一五　八五　信州小布施旅行。東町山車天井画「鳳凰・龍図」を描く。

一八四五　弘化　二　八六　信州小布施旅行。上町山車天井画「濤図」を描き、同地岩松院天井画「鳳凰図」の下絵を描く。翌年まで滞地。

一八四七　四　八八　最期の信州旅行。岩松院天井画『鳳凰図』制作。(p.88)

財団法人北斎館『肉筆葛飾北斎』財団法人北斎館、1996年4月

＊カラー写真。東町祭屋台、東町祭屋台天井絵「龍」「鳳凰」。上町祭屋台、上町祭屋台天井絵「男波図」「女波図」（キューピッドあり）1992年9月のものと同様の写真であるが、下方に英語で説明が入っている。ただし、キューピッドに関する説明はない。

＊「解説」及び「北斎の画号と画業概観」では「女波図」についてはあるものの、キューピッドについては言及はない。

＊葛飾北斎年譜

「一八四四　弘化　元年　八五　「雪中筍狩」（画今狂老人卍試筆　齢八十五歳　印＝葛し可）
信州小布施で上町祭屋台天井絵ほかの制作にあたる

四五　弘化　二年　八六　奉納額「須佐之男命厄神退治之図」（前北斎卍筆　関東大震災

で焼失）
信州小布施で上町屋台天井絵
ほかの制作にあたる。(p.88)

城政行編『美術画報』（特集：画狂が極めた美の頂点　北斎の肉筆画）（第36号）朝日アートコミュニケーション、2002年9月
「北斎館に見る晩年の境地　小布施の北斎」(pp.26-27)
＊カラー写真。東町祭屋台、東町祭屋台天井絵「龍」「鳳凰」。上町祭屋台、上町祭屋台天井絵「男波図」「女波図」（キューピッドあり）
＊年譜なし。

葛飾北斎美術館編『葛飾北斎展』浮世絵太田記念美術館
＊東京初公開
＊永田生慈「葛飾北斎　人と作品」では小布施、上町祭屋台天井絵に関する記述は一切ない。

永田生慈監修『もっと知りたい葛飾北斎　生涯と作品』東京美術、2005年8月
＊「第六章　肉筆画の時代」の章もあるが、小布施滞在や屋台天井絵についての言及はない。

『葛飾北斎　初摺北斎漫画（全）』小学館、2005年10月
「葛飾北斎略年譜」
天保一四年（一八四三）八四歳
第一次信濃国小布施（長野県）行。祭屋台天井絵の下絵を描く。祭屋台天井絵「怒濤図」（男波図・女波図）、牛島神社絵馬「須佐之男厄神退治図」（焼失）を描き、岩松院天井絵「八方睨鳳凰図」下絵を描く。」(p.10)

河野元昭『北斎の花』（浮世絵ギャラリー１）小学館、2005年10月

「19　上町屋台天井絵　怒濤図『女浪図』」

弘化２年（1845）　銅板着色　118×118.5cm

長野、北斎館　▸全図 p49 部分図 p.48～29

弘化１年85歳の北斎は、後援者の素封家高井鴻山の招きを受けて信州小布施（長野県小布施町）に向かい、そこに旅装を解く。翌年も出かけ、この祭屋台（山車）の天井絵を仕上げた。とくにすばらしいのは、上町祭屋台の「男(お)浪(なみ)図(ず)」と「女浪図」からなる「怒涛図」で、逆巻く波を超えて、諧調を奏でる宇宙(コスモス)を感じさせる。2面とも縁絵で飾られるが、ここに掲出するのは「女浪図」の縁絵。神事のための屋台に、ローマの恋愛神キューピッドを堂々と配してしまう北斎のイマジネーションに、ただ脱帽あるのみだ。(p.48)

＊額縁絵も拡大されている。(pp.48-49)

永田生慈監修・解説『北斎漫画展―江戸伝承版木を摺る』（葛飾北斎生誕250年記念）アートシステム、2010年、展示会のカタログ

＊「葛飾北斎略年譜」

弘化二年（一八四五）八六歳

前年に續き二度目の信濃国小布施に旅する。祭屋台天井絵「怒濤図」（男波図・女波図）を描く。(p.106)

＊岐阜市歴史博物館

2010年4月23日（金）から5月30日（日）

太田記念美術館『北斎とその時代』（生誕250周年記念）太田記念美術館

＊小布施、上町祭屋台天井絵に関する記述はない。

＊葛飾北斎略年年表にも小布施等に関する記述なし。

美の巨人　2011年10月8日放送　22：00～22：30　テレビ東京

＊葛飾北斎『怒涛図』

＊「“ミステリー絵画シリーズ”2週目の今回は、葛飾北斎作『怒涛図』。120cm四方の桐板2枚に描かれた肉筆画で、それぞれ「男浪」「女浪」と名付けられています。激しいうねりを見せるのは「男浪」。2色の浪が炎のようにゆらりと立ち上がるのは「女浪」です。描かれているのは、ただ浪だけというシンプルさ。けれども、浪の四方を彩る額縁に目を向けると、「女浪」の額縁になんとエンゼルが描かれているのです。時はまさに鎖国の只中。キリシタンにまつわるものを描けば、厳罰必至のご時世です。北斎は、なぜ危険を承知でエンゼルを描いたのか？その謎を解こうとする時、この絵に込められた北斎の深遠な企みが見えきたのです。」(5)

永田生慈監修『北斎絵事典［完全版］』東京美術、2011年6月

＊「北斎年表」に小布施訪問の記載なし。怒濤図の記載なし。

公開研究会（2）「外国人による観光イノベーション」

＊セーラ・マリ・カミングス講演会記録

日　時：2015年12月7日

場　所：文教大学湘南キャンパス

講演者：セーラ・マリ・カミングス（株）文化事業部代表取締役

講演テーマ:外国人による観光イノベーション～気づかない発信へ

講演内容【北斎の絵について】

日本で北斎の痕跡が最も残っているのが小布施。なぜ、北斎は命をかけて小布施まで歩いてきたのか？早い時代のパブリックアートだったのだと思う。北斎のこの絵を見ると、純日本風という風に思われるかもしれないが、実は青色の絵具はベルギーブルーと言

われているし、キューピットが描かれていたり、リースは西洋を象徴している。(6)

竹内隆「小布施祭り屋台天井画に込められた葛飾北斎の願い（一）　上町天井画の波濤は男浪・女浪でＳ字を示唆」（『研究紀要』第４集、財団法人北斎館北斎研究所、2012年１月）

＊「はじめに」

「天保十四年（一八四三）葛飾北斎は高井鴻山に手紙を出して翌年春の小布施訪問を告げた。鴻山は北斎を招き、居住する小布施村上町に新築する祭り屋台の天井絵を北斎に描いてもらうことを考えて、強く誘ったものと思われる。また北斎の側でも、質素倹約や浮世絵への弾圧を強める水野忠邦による天保の改革を避け、地方で自由な創作活動を望んだことであろう。

東町の祭りや天井画「龍図と鳳凰図」は北斎が天保十五年（弘化元年一八四四）の小布施旅行の折りに描いたものとされ、一方上町祭り屋台の「怒濤図（浪図）」は弘化二年の作品である。」(p.46)

＊「（五）縁画と浪図は一体『羽根の男子はキューピッドか』」

「『女浪図』縁絵の底部左側には、羽根をもつ裸体の男子がうつむいて左膝を立て、花の茎をつかんで空中を移動している姿が描かれている。北斎は水中を泳ぐ男子を『北斎漫画』で描いているが、その男に羽根を付けた様子にも似る。

羽根に注目して男子をキリスト教の天使エンジェルという見方もあるが、ざんばら髪でうつむいた顔から気高さは感じられない。また、天使エンジェルは絵画では白くて長い翼を付けて衣裳をまとい、優美な男性か勇士に描かれたものが多い。一方キューピッドは本来ローマ神話の愛の神クピドであり、ギリシャ神話の愛の神エロスで金色の羽根と弓矢を持った裸の少年であるが、天使と混同されて羽根をもつ子供や女性的な姿で表わされることが多い。

縁絵の男子は弓を持たなくとも、つかんでいる茎は弓状に湾曲

している。天使でなくともキューピッドに見えるかといえば、羽根を持ち裸であるが、愛に繋がる所作はない。また羽根は男子の左側は開いているが、右側は花を描くスペースを確保するためは開きである。男子がキューピッドか否かは縁絵全体からみていく必要があると思う。」(p.62)

北斎の小布施訪問などについては年代等の差異はあるにしろ、飯島虚心『葛飾北斎伝』(1893)よりすでに言及はされていたが、肉筆の屋台天井絵についてはその後の研究によるものである。また、キューピッドについて厳密に言えば、北斎が下絵として描いたが、彩色したのはその弟子高井鴻山である。

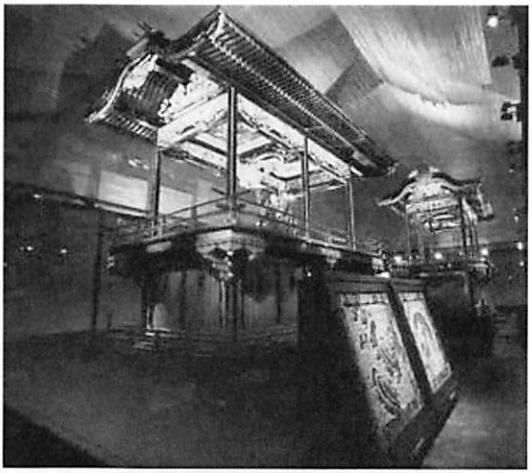
これまでの研究では荒井勉『北斎の隠し絵』(1989) と竹内隆「小布施祭り屋台天井画に込められた葛飾北斎の願い (一)　上町天井画の波濤は男浪・女浪でＳ字を示唆」(2012)が北斎のキューピッドについて比較的詳細に論じているが、まだまだ分析は進んでいないと言ってよいだろう。

4　葛飾北斎の描いたキューピッド

北斎が西洋の受けていたことを彷彿させるものに『上町祭屋台天井絵・怒濤図』(1845) がある。屋台天井絵は２枚描かれており、「怒濤図」と呼ばれている。「怒濤図」は２枚あることから、「女波図」と「男波図」と言われている。ここに描かれている波が時代の変化を表現しているものであると解説しているものもあるが、ここで注目したいのは額縁絵の部分であるため、「怒濤図」の解釈については今回は触れないこととする。

さて、屋台天井絵の屋台はいわゆる山車のことである。その屋台

の天井に描かれた絵ということで、上町屋台天井絵と言われているのである。北斎が残した立体造形物で、肉筆ということから注目を浴びている。現在、長野県小布施の北斎館に常設展示されている。これまでは図録でしか見ていなかったが、筆者も 2016 年 11 月に実際にそこを訪れ、『上町祭屋台天井絵・怒濤図』を観て来た。限定貿易（鎖国）中の江戸時代後半に北斎が欧州に与えた影響、また、西洋から受けた影響については興味深いところである。『上町祭屋台天井絵・怒濤図』(1845) の「女波図」の額縁には天使が描かれていることは注目に値する。館内は撮影禁止となっているため、「女波図」は同館のＨＰより紹介したい、ここでは残念ながら、モノロ印刷のため、その色彩豊かなで力強さを十分にご覧いいただくことができない。実際の色彩については同館のＨＰをご覧頂きたい。「波図」について注目すべきは、その波の図柄ではなく、縁の部分である。



右の縁には鸚哥（インコ）あるいは極楽鳥、栗鼠（リス）と思われる動物が描かれている。(7)

次の頁に各部分を拡大したもをの示したい。リスの種類にはニホンリスといったものあり、アイヌが狩猟していたとも言われる。北斎がこれを日本の動物として認識していたかどうかは不明である。また、インコあるいは極楽鳥としたこの赤い鳥も実際には何を描いたのかはわからない。

羽が赤い鳥としてはアカフウキンチョウ(Scarler Tanager)もいるが、特定するのは難しい。極楽鳥とも言われている。いずれにしてももともと日本にいた鳥ではないことは確かだ。そして最後がキューピッドあるいは天使とでもいえばよいのか、この謎めいた羽の有る裸体の人物絵が描かれているのである。

「女波図」や「男波図」では「波」が大きく取り上げられることが多い。縁絵については「男波図」については取り上げられることが多いが、「女波図」については本格的な分析はまだなされていないといってもよいのではないだろうか。

鸚哥
(インコ)

栗鼠
(リス)

キューピッド (8)

部分的に拡大したもの

5　縁絵に描かれた羽根を持つ裸の男子

本稿のタイトルでは「キューピッド」と表現したが、これまでの研究の指摘では「天使」という言葉による指摘がなされているため、まず「天使」とは一般的にどのような定義であろうか。英語で言えば、angel と cupid があるようにキューピッドも考えなくてはならない。キューピッドの定義についても確認しておく必要があるだろう。一般的な定義として以下のようになるだろう。

新村出編『広辞苑』(2008)

てん・し【天使】

① 天子の使。勅使。「正法眼蔵行持上「―また食を再送して師を尋見するに」② (ギリシア語の angelos は「派遣された者」の意) 神の使者として派遣され、神意を人間に伝え、人間を守護するというもの。セラブム (熾し天使)・ケルブム (智天使) など。エンゼル。エンジェル。<哲学字彙>③比喩的に、やさしく清らかな人。「白衣の―」[9]

大辞林 第三版の解説 (インターネット)

てんし【天使】

① ユダヤ教・キリスト教・イスラム教などで、神の使者として神と人との仲介をつとめるもの。ペルシャに由来する観念とされる。エンジェル。
② やさしい心で、人をいたわる人。女性についていうことが多い。「白衣の一」
③ 天子の使者。勅使。〔③ が原義。① は、ロプシャイト「英華字典」(1866～69 年) に angel の訳語として載る。福沢諭吉「西洋事情」(1866～70 年) が早い例〕(10)

<u>Merriam Webster</u>
Definition of angel
1a : a spiritual being superior to humans in power and intelligence; especially : one in the lowest rank in the celestial hierarchyb angels plural : an order of angels — see celestial hierarchy
2 : an attendant spirit or guardian guardian angels who watch over us
3 : a usually white-robed winged figure of human form in fine art
4 : messenger, harbinger an angel of death
5 : a person who is like an angel (as in looks or behavior) Your son is such an angel. She's no angel. Be an angel and get me a cup of tea, would you?
6 Christian Science : inspiration from God
7 : one (such as a backer of a theatrical venture) who aids or supports with money or influence Angels funded the start-up company.
8 : angelfish (11)

<u>新村出編『広辞苑』(2008)</u>
キューピッド【Cupid】(Cupido ラテン)ローマの恋愛の神。ヴィーナ

スの子。通常、裸で背に小さい翼が生え、弓を手にする子供として描かれる。その矢に射られると恋におちるとされる。クピド。→エロス[12]

デジタル大辞泉　キューピッド【Cupid】の意味（インターネット）
ローマ神話の恋の神クピドの英語名。ビーナスの子。弓矢を持つ裸の有翼の少年で、その矢に当たった者は恋心を起こすという。ギリシャ神話のエロスに当たる。[13]

Merriam Webster
Definition of Cupid
1：the Roman god of erotic love — compare eros
2　not capitalized：a figure that represents Cupid as a naked usually winged boy often holding a bow and arrow[14]

ここでは天使、エンジェル、キューピッドということの分類上のことを問題視しているわけではなく、北斎が西洋の事物あるいは聖獣といったような空想上の生き物をどのようにして描いたのか、なぜ描いたのかを問題視したいのである。

辻惟雄『北斎の奇想』(2005) でも次のような指摘がある。

金色の縁に描かれたエキゾティックな花鳥やエンジェルの文様が異色である。[15]

なお、『怒濤図』には「男波図」「女波図」(「男浪図」「女浪図」と言わることもある) があるが、「女波図」の額縁には天使の外にもインコ２羽、リス２匹も描かれている。植物についての分析を行っていないが、ここにも大きな意味があることだろう。

『怒濤図』の発見の経緯等については荒井勉『北斎の隠し絵』(1989)

に詳細が論じられている。『上町祭屋台天井絵・怒濤図』(1845) は現在、長野県小布施町の北斎館で保存されているが、北斎自身、高井鴻山 (1806 - 1883) の招きで 1842 年に始めて小布施の地を訪ねた。北斎は 80 歳を越えてから小布施を訪ねたのである。当時、倹約を強制する天保の改革が始まったのが、1842 年で娯楽施設の閉鎖、出版物の禁止にも及んだ。渡辺崋山 (1793-1841)、高野長英(1804-1850)を検挙した鳥居耀蔵 (1796-1873) は南町奉行となり、北斎と親交のあった柳亭種彦 (1783-1842) も罰せさられ、最終的には死に至った。

『女浪図』の周辺に描かれている動物について観察してみてところ、『男浪図』と同様三種類の動物が描かれていた。エンゼルが一人、インコが二羽、リスが二匹である。

エンゼルは、神のいる聖域から飛んでくることのできる動物とされている。したがって葛飾北斎は、エンゼルを聖獣の一種類と考えて描き込んでいたと言える。キリスト教の知識ルートについては、後の章で示したい。

裸の童子に翼が生えている姿というのは、日本の絵の中には存在しない。その点では、まさしくエンゼルの姿を葛飾北斎は描いている。が、エンゼルを描いた場所は小布施である。かつて洋書で見たエンゼルを葛飾北斎は、記憶の中から引き出して描いていたことになる。洋書を模写する作業とは違いが出てきて当然であろう。

エンゼルの頭髪は、西洋人らしく栗色である。しかし、西洋人のようにカールしておらず、真すぐな髪の毛で描かれている。また、西洋のエンゼルは、白鳥の翼をつけている。しかし北斎のエンゼルの翼には茶色の色彩が混じっている。つまり、スズメの翼をつけさせている。したがって葛飾北斎の描いたエンゼルは、東洋化されて表現されたものとなっている。(16)

北斎の研究論文である竹内隆「小布施祭り屋台天井画に込められた葛飾

北斎の願い（一）　上町天井画の波濤は男浪・女浪でＳ字を示唆」（2012）の中で「（五）縁画と浪図は一体『羽根の男子はキューピッドか』」において次のように取り上げている。

「女浪図」縁絵の底部左側には、羽根をもつ裸体の男子（写真 18）がうつむいて左膝を立て、花の茎をつかんで空中を移動している姿が描かれている。北斎は水中を泳ぐ男子を「北斎漫画」で描いているが、その男に羽根を付けた様子にも似る。

羽根に注目して男子をキリスト教の天使エンジェルという見方もあるが、さんばら髪でうつむいた顔から気高さは感じられない。また天使エンジェルは絵画では白くて長い翼を付けて衣装をまとい、優美な男性か勇士に描かれたものが多い。一方キューピッドは本来ローマ神話の愛の神クピドであり、ギリシャ神話の愛の神エロスで金色の羽根と弓矢を持った裸の少年であるが、天使と混同されて羽根をもつ子供や女性的な姿で表わされることが多い。

縁絵の男子は弓を持たなくとも、つかんでいる茎は弓状に湾曲している。天使でなくともキューピッドに見えるかといえば、羽根を持ち裸であるが、愛に繋がる所作はない。また羽根は男子の左側は開いているが、右側は花を描くスペースを確保するため半開きである。男子がキューピッドか否かは縁絵全体からもみていく必要があると思う。（17）

当時の対オランダ、中国、朝鮮との限定貿易、すなわち鎖国政策では、外国からの貿易を長崎の出島に封じ込めたように思いがちであるが、北斎の「女波図」などを見る限り、どこかでキューピッドあるいは天使の絵を見ない限りあれだけのものは描けないのではないかと思うほうが自然であろう。また、北斎が南蛮人と交流があったということからも推測の域は出ないが、北斎と西洋画の接点とその影響ということも今後の課題となろう。

北斎のキューピッドを見て感じることは以下の通りである。

1　キューピッドなのか、それとも天使なのか。ポイントとして目を閉じていることからキューピッドではないかと思える。愛の神は眼で見るのではなく、心で見る。

2　キューピッドが持っている植物に何か意味があるのでろうか。

3　キューピッドの翼がまるで雀のような翼になっている。

（18）

4　キューピッドは「白」というイメージがあるが、ここではそうした色彩ではない。

5　裸体ということに意味はあるのか。

5　宗教的なものが感じられない。

ちなみに、島原の乱の時代に生きた山田右衛門年(1575-1657)の『天草四郎陣中旗』(『聖体讃仰天使図旗』) にはまさに天使が描かれている例などもあり、影響関係の調査は新しい資料の発見により新展開を迎えることがある。

『天草四郎陣中旗』(『聖体讃仰天使図旗』) は 1637 年の天草四郎が島原の乱で使用されたものとされている。北斎のキューピッドとは異なり、ここには宗教感がある。

こうした事実は高等学校の検定教科書では扱えるものではなく、大学の国際文化交流としてもふさわしい内容である思える。実際に筆者が担当する「国際文化交流」の授業でも取り上げているが、学生の中で葛飾北斎が描いたキューピッドについては当然、誰一人知る者はなかった。

6　『北斎漫画』に描かれた羽根を持つ人

北斎の描いたキューピッドが如何に特別なものであるかは、北斎がこれまでに描いてきたものと比べることで明確化するのではないだろうか。『北斎漫画』に描かれた羽根を持つ人、また、キューピッドを意識して弓を持つ人の２つの観点からいくつか取り上げてみたい。

羽根のある人としてすぐに連想されるのは天狗であろう。天狗は裸ではないため、「女波図」のキューピッドの絵とは大きく異なる。羽根があり、裸ということになると、羽民、晏陀蛮、手長足長を描いた「蛮国の灸治」のところにも描かれている。これらはどうみても東洋的である。また、羽民は中国の伝説上の人種として『山海経』『三才図会』でも紹介されている。武将を描く際に弓を弾く姿も『北斎漫画』等では描かれているが、地獄と称したところで黒塗りの人物が弓を弾く姿も描かれている。

これまでの北斎のキューピッドあるいは天使に関する言及論文等において、泳ぐ人に羽根をつければ似ているかもしれないという指摘はあったものの、羽民等への指摘は見られない。『北斎漫画』に描かれている羽根を持つ人との比較や類似絵への言及も見られなかったため、今回あらたに列挙してみた。また、イメージを比較するため、西洋絵画に描かれた羽根のある天使も並列してみた。北斎が西洋絵画を本当に見たのか、あるいはどの絵を見たのかなど断定することはできないが、北斎の画力は驚嘆の域に達している。

（19）
ラファエロ『ガラティアの勝利』

北斎のキューピッド、天使、日本の天狗、中国の伝説の羽民、西洋のキューピッド、天使を比べてみても北斎の裸体男子は西洋寄りであることは明らかである。西洋絵画でも必ずしも天使が白、翼が白で描かれているわけではない。このようにしてみると北斎は中国のものからではなく、西洋のものを参考にしてキューピッドを描いたとしか考えられないで

はないだろうか。

エピローグ

北斎の描いた裸体男子が「キューピッド」なのかどうかははっきり断定することはできないが、『北斎漫画』で描かれた類似のものと比較してみても、東洋的なものとして捉えることは難しい。北斎が天使（エンジェル）とキューピッドのどちらを描いたのかは興味のあるところであるが、この天井絵縁絵で重要なことは、日本のものではない、いわゆる西洋のものを描いたという点である。単に羽根のある人を描くことが目的なのであれば、これまでの『北斎漫画』をさらに発展させたものを描いてもよかったわけであるが、天井絵縁絵にはリスやインコといった西洋の動物などが描かれていることも考慮しなければならないだろう。北斎がオランダ人と交流のあったことは既に多くの研究者からも指摘をされているばかりでなく、北斎とオランダ人の間で絵の売買が成立していたことなどを考えると、北斎が西洋絵画を見たような記録等が発見されれば、新たな展開を迎えることとなろう。推測の域は出ないが、北斎がキューピッドを描けた理由はいくつかあろう。

1　若い頃にオランダ人を通して西洋絵画を見て、晩年にその時のことを思い出し、天井絵縁絵として肉筆画として描いたのではないか。
2　北斎と交流のあった豪商が西洋絵画を所持し、密かに北斎にその絵画を見せたのではないか。
3　豪商・高井鴻山は北斎の弟子でもあり、妖怪画に優れていた。その高井鴻山は西洋絵画あるいはキューピッド、天使にまつわるような資料を保有し、それを北斎が見たのではないか。
4　小布施の天井絵縁絵以外にキューピッドを描いた作品がないため、なぜ、小布施だったのかを考えることも重要。江戸でこうした作品を描くこと自体が危険と感じ、江戸から遠く離れた小布施の地で挑

戦したのだろうか。

5　北斎がキューピッドを描いたのは晩年のことであることも考える必要がある。北斎にとっては晩年となり、肉筆画を中心に１点ものへの挑戦をし続けたのではないだろうか。

１と２については北斎が「手前びっくり画法」「手前たっぷり画法」を活用し、西洋画の遠近法と異なり、独自の表現法を確立する以前には勝川春章(1726 又は 1743-1793)に入門し、そこで洋風画法を学んでいたことは横地清『日本をすり抜けた西洋　北斎の知恵、そして写楽』(2008)他の研究書で指摘されている。[20]

今後期待される研究は後半の３・４・５であろう。特に３・４は大きな鍵になるのではないかと思える。高井鴻山がいなければ、北斎が小布施に訪れることはなく、重要なキーパーソンであることは間違いのないところである。

注

(1) 文学博士である平辰彦（平宗星、講演活動等での名前）氏より 2015 年４月 11 日の第 13 回アサガヤワークショップ「比較演劇学から見る日本の沙翁」に参加した際、近松門左衛門とシェイクスピアが話題となり、その後、講演後の懇談の中で、近松洋男『口伝解禁　近松門左衛門の真実』(2003) が話題となり、後日、同書籍を入手した。

(2) 『エッフェル塔三十六景』については「フランスと日本」(http://expositions.bnf.fr/france-japon/albums_jp/eiffel/index.htm)(2017 年４月 19 日アクセス)

(3) McGray, Douglas. “Japan’s Gross National Cool”（*Foreign Policy*. May/June, 2002）。通例、クール・ジャパン論の名で知られるようになった。なお、マッグレイ／神山京子訳「世界を闊歩する日本のカッコよさ」(『中央公論』第 188 巻第５号、中央公論社、2003

年５月）として翻訳も発表されている。

(4) 永田生慈『葛飾北斎の本懐』（KADOKAWA、2017 年 3 月）、pp.156-157.

(5)「美の巨人　2011 年 10 月 8 日放送　22：00～22：30　テレビ東京　葛飾北斎『怒涛図』」
(http://www.tv-tokyo.co.jp/program/detail/201110/14857_201110082200.html)(2017 年 4 月 27 日アクセス)

(6) 公開研究会（２）「外国人による観光イノベーション」
(http://www.bunkyo.ac.jp/faculty/gs-inter/seminar/%e5%85%ac%e9%96%8b%e7%a0%94%e7%a9%b6%e4%bc%9a%ef%bc%88%ef%bc%92%ef%bc%89%ef%bc%9a-%e5%a4%96%e5%9b%bd%e4%ba%ba%e3%81%ab%e3%82%88%e3%82%8b%e8%a6%b3%e5%85%89%e3%82%a4%e3%83%8e%e3%83%99%e3%83%bc%e3%82%b7/)(2017 年 4 月 27 日アクセス)

(7) 「上町屋台」の写真
(https://www.bing.com/images/search?q=%e4%b8%8a%e7%94%ba%e7%a5%ad%e5%b1%8b%e5%8f%b0%e5%a4%a9%e4%ba%95%e7%b5%b5%e3%83%bb%e6%80%92%e6%bf%a4%e5%9b%b3&view=detailv2&&id=BA1FA1D7F4B2222CAE4F3ED51FF48FA2841461ED&selectedIndex=52&ccid=OOUQ71la&simid=607990383453079460&thid=OIP.OOUQ71laK4ojMHZvn4o6KgEsES&ajaxhist=0)(2017 年 2 月 5 日アクセス)

(8)「上町祭屋台天井絵・怒濤図」
http://www.hokusai-kan.com/yatai/kanmachi_yatai05.html(2017 年 2 月 5 日アクセス)

(9) 新村出編『広辞苑』（岩波書店、2008 年 1 月）、p.1944.

(10)「天使」
(https://kotobank.jp/word/%E5%A4%A9%E4%BD%BF-102319#E3.83.96.E3.83.AA.E3.82.BF.E3.83.8B.E3.82.AB.E5.9B.BD.E9.9A.

9B.E5.A4.A7.E7.99.BE.E7.A7.91.E4.BA.8B.E5.85.B8.20.E5.B0.8F.E9.A0.85.E7.9B.AE.E4.BA.8B.E5.85.B8)(2017 年 4 月 1 日アクセス)
(11) “Definition of angel”
(https://www.merriam-webster.com/dictionary/angel)（2017 年 4 月 20 日アクセス）
(12) 新村出編『広辞苑』（岩波書店、2008 年 1 月）、p.719.
(13) 「キューピッド」
(http://dictionary.goo.ne.jp/jn/55418/meaning/m0u/)（2017 年 4 月 1 日アクセス）
(14) “Definition of Cupid”
(https://www.merriam-webster.com/dictionary/Cupid)（2017 年 4 月 20 日アクセス）
(15) 辻惟雄『北斎の奇想』（浮世絵ギャラリー３）（小学館、2005 年 11 月）、pp.23
＊同書には怒濤図の「男浪図」「女浪図」の図版が収録されている。
(16) 荒井勉『北斎の隠し絵』（ＡＡ出版、1989 年 12 月）、p.46.
＊2011 年 10 月 8 日(土)22:00～22:30 放映のテレビ東京「美の巨人【葛飾北斎「怒涛図」】でも取り上げられた。
(http://www.tv-tokyo.co.jp/kyojin/backnumber/11008/（2015 年 9 月 1 日アクセス）
(http://tvtopic.goo.ne.jp/program/tx/618/517253/（2015 年 9 月 1 日アクセス）
(17) 竹内隆「小布施祭り屋台天井画に込められた葛飾北斎の願い（一）上町天井画の波濤は男浪・女浪でＳ字を示唆」（『研究紀要』第 4 集、財団法人北斎館北斎研究所、2012 年 1 月）、p.62.
(18) http://www.amakusa.tv/jintyuki.html (2017 年 2 月 5 日アクセス)
(19)『ガラティアの勝利』
(http://www.h6.dion.ne.jp/~em-em/page306.html)(2017 年 4 月 27 日

アクセス)
(20) 横地清『日本をすり抜けた西洋　北斎の知恵、そして写楽』(東海大学出版会、2008年10月)、p.59-99.
＊なお、本書では小布施の天井絵縁絵のキューピッドには言及はない。

【キーワード】葛飾北斎、キューピッド、天使、羽民、小布施

＊本稿は2009年度から実施されている武蔵野学院大学・武蔵野短期大学教員免許状更新講習「豊かな人間性をはぐくむ指導力の向上」(国際理解)(この分野の担当は2015年度より)の際に講習内容としてクール・ジャパンの前身として江戸時代におけるヨーロッパのジャポニスムを取り上げ、その代表的な人物として葛飾北斎を取り上げたものをまとめた。北斎の『富嶽三十六景』や『北斎漫画』はよく取り上げられるが、講習では北斎の肉筆画として屋台天井絵として描かれた天使についても触れてきた。そのことは同講習の報告書にも記載するとともに、大学の武蔵野学院大学の授業科目「国際文化交流」でも取り上げてきた。さらに実践報告書「教育実践例　教材に関する学生の反応と指導—国際文化交流」(『武蔵野教育研究会』第3巻第9号、武蔵野教育研究会、2017年7月)でさらに本格的にまとめたが、これらの内容をさらに発展させ、本稿は「北斎の描いたキューピッド」だけを取り上げて論じたものである。なお、フィールドワークでは小布施の北斎館及び墨田区のすみだ北斎美術館をはじめ、国立国会図書館、横浜美術館情報センター、早稲田大学演劇博物館等を利用した。

執筆者一覧

佐々木　隆　　武蔵野学院大学教授

武蔵野教育研究　第３巻第11号
2017年９月１日　発行
武蔵野教育研究会　編集・発行

〒350-1328
埼玉県狭山市広瀬台３丁目２６番１号
武蔵野教育研究会事務局
武蔵野学院大学　佐々木隆研究室